
バースデイ・ブルー

愛田雅

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

バースデイ・ブルー

【Nコード】

N8886B

【作者名】

愛田雅

【あらすじ】

三十歳という節目の誕生日に、長年付き合った恋人と会えない主人公：春日千里。誕生日にプロポーズしてもらえと思っていた千里は、同僚たちと飲み会に行くのだが……。

パーティー前夜

明日、私は三十歳になる。三十路に突入するとも言つ。

小さいころは、あんなに年が一つ増えることを喜んでいたので、今ではすっかり喜ばなくなっている。特に、今日がそうだ。いつまでも二十代でいたい。だけど、後一つ朝を迎える頃には、もう三十代になっているのだ。

いつからだろう。時が過ぎることが残酷に思えるようになったのは。

すでに、肌の方は荒れたりたれたりしてきている。ついこの間まで、ろくに手入れをしなくてもつるつるの肌だったはずなのに、今では念入りに手入れをしてもなかなかこのたるみはなくなつてはくれない。

せめて見た目くらいは二十代でいたい。と、思っているけれど、なかなかそうはさせてはもらえないらしい。二十代最後の夜、風呂上りの鏡に映る私の顔は、目の下にクマがあり、口元がたるんでいる。両手を頬に当て、たるみを軽く上げてみる。五秒くらいそのままにして、すつと手を離すと頬はすつと元の位置に戻った。

深くため息を一つつくと、化粧水をたつぷり掌に載せて、顔中に塗りたくった。水分をたつぷりと肌に与えて、何とかこのたるみを無くすのだ。

化粧水をたつぷりと塗り、その後、美容液を丁寧に顔中に塗った。これで、顔の手入れは終了。休みの日や、時間に余裕があるときには、パックもするのだが、今日はとてもそつという気分にはなれなかった。

あるはずのものが無いのだ。

明日は、私の誕生日だと言つのに、高校生から付き合っている彼氏：金塚俊雄からは、電話がかかってこない。こんな大事なときに、どうして……。

時計に目をやると、午後十時を過ぎる頃だった。ドレッサーから離れて、テーブルに置いた携帯を見る。着信はなかった。

一人暮らしの我が家は、テレビをつけたり音楽をかけなければしんと静まり返っている。電話がかかってくれば、必ず気がつくはず。気がつかないとすれば、トイレかお風呂に入っているときだけだ。

今日は、どうしたんだろう……。

心細い心に押しつぶされそう。台所で軽く手を洗い、冷蔵庫から作り置きのお茶を出して、グラスに注いだ。こじんまりとしたリビングテーブルの上に置いてある携帯をうらめしそうに見つめながら、いつも座っている椅子に腰掛けた。

と同時に、ようやく携帯が鳴った。一口お茶を口に含みながら携帯に出た。

「あ、もしもし。俊雄？ 今日はどうしたのよ。遅かったじゃない」
俊雄に見えるはずがないのに、なぜか口を尖らせた。

「悪い悪い、今日は残業だったんだよ。怒ってるのか？」

電話越しであるが、俊雄の表情が目には浮かんできた。口では「悪い」と言っているけれど、決して悪いと思っていないだろう。

「怒るわよ。今日は、何の日だかわかっているの？」

「誕生日前夜……。だろ？」

返答は、すぐにあっただ。私の誕生日はちゃんと覚えているのだ。付き合いが長いから、当たり前かもしれない。だけど、連絡が遅かったので今年は忘れてしまったのではと思い込んでいた。

「覚えてたんじゃない。で、明日はどうするの？ どこで会う？」

毎年、誕生日は会うことにしている。去年は、私が行きたがっていたお好み焼き屋で食事をした。お互いが頼んだお好み焼きを焼きあいつこしたりして、楽しい誕生日だった。

「今年は……、悪い。明日はどうしても無理そうなんだ」
む、無理って、明日は記念すべき 嫌な節目ではあるけれど
私の誕生日なのよ。

気がつく、私はテーブルの上で空いている右手を強く握っている

た。まるで、俊雄が目の前にいるかのようになり、今すぐでもパンチをお見舞いしようとしているようだった。

「無理して、どういうことよ！ 毎年、誕生日は絶対に会おうって約束したじゃない！」

「でも、明日は無理なんだよ。どうしても抜けられない用事が出来たんだ」

強く握っていた右手から力が抜けた。力が抜けたのは右手だけではなく、全身だった。

誰もいないリビングテーブルの向こう側を目を丸くして見つめた。そこには、さっきまでいたドレッサーがあった。

「そんな……」

力のない声を吐いていた。

「本当にごめんな。次の休みの日にでもプレゼントを渡すから」

ようやく優しい俊雄の声になった。隣で私の頭を優しく撫でるような声。

必ず明日会えると信じていたのに、今年の誕生日は俊雄に会えないんだ。

電話を切ると、携帯をテーブルの上に置き、今にも椅子から落ちてしまいそうなほどに頂垂れた。深いため息をつくとき、俊雄の顔を思い浮かべた。

はつきりとした二重で、女性のように柔らかい髪。今でも覚えている。俊雄と最初に会った日のことを。

俊雄と出逢ったのは、高校二年のときだった。同じクラスになり、初めてお互いの存在を知ったのだ。クラス替えがなければ、私たちは会おうことはなかっただろう。

高校二年の最初の登校日に、昇降口横の壁に貼ってあるクラス替え発表の張り紙を見ても、俊雄の名前がそこにあつたかどうか、いまだに覚えてはいない。そのときは、まったく「金塚俊雄」と言う人間を知らなかったのだ。

教室に入り、自分の席につくと、隣の席から視線を感じた。それ

は、俊雄の視線だった。強く視線を感じ、私はそちらを向いた。そこには、頬杖をついた俊雄がいた。
「おはよう」

話し掛けたのは、俊雄の方だった。

まさか、男子から挨拶されると思っていなかった私はあたふたしながら返事をするのがやっとだった。

そして、俊雄と言う男子が馴れ馴れしい奴だと私の頭にインプットされた。

後で俊雄から聞いた話によると、俊夫は私に一目惚れしたらしい。健康的ではない肌の白さに、心がときめいたとか。健康的ではないという言葉が余計ではあったが、俊雄に一目惚れされたことは私という女性を一目で認められたと言う自信につながった。

それまで、あまり女性として扱われていなかった私は、男子とも友達として付き合うことしかなかった。しかし、俊雄は違った。私と俊雄は、一番後ろの席だった。なぜか、最初の国語の時間に先生が全員に配るためのプリントを職員室に忘れたと言い、「かのつく人」が取りに行かされることになった。

俊雄の苗字は「金塚」、私の名前は春日千里。他にかのつく人は、私たちのクラスにはいなかった。国語の先生の名前が「神田」ってだけで、私たちがプリントを取りに行かされたことに、私はいらついていた。

二人で一緒に三つも下の階の職員室に行きながら、
「なんで私たちが、わざわざこんなことをしなくちゃならないのよ！」

授業中で、誰もいない階段で私の怒号が響いた。すぐに、俊雄が「シート」と言ったので、ほんの少しだけ落ち着きを取り戻した。

「いいじゃん。取りに行く間、授業を堂々とさぼれるんだから」

俊雄は、嬉しそうにそう言った。確かに、言われてみればそうだ。その言葉を聞くまで、火山が今にも噴火しそうなくらいに怒りがたまっていたが、すっとその怒りがひいていった。

ゆっくりと階段を下り、職員室で神田先生の机の上に置いてあるプリントを私が持っていていこうとすると、

「俺が持っていくよ」

そう言っつて、俊雄がプリントを全部持ってくれた。

今でも覚えている。国語のプリントは、全部で三種類あった。だから、私は自分が一種類持つて、俊雄が二種類持てばいいと考えていた。しかし、俊雄が全部持つてくれた。このとき、初めて男性に女性として扱われた気がした。

教室に戻るまでの道のりは、心が弾んでいた。初めて、女性として扱われた喜びでスキップを踏みたくらいだった。しかも、隣には私を女性として扱ってくれた俊雄がいる。

プリントを持ちづらそうな俊雄に何度か「少し持つよ」と言ったのだが、「平気だつて」と言っつて、俊雄はプリントを全部持つていてくれた。

階段を上るとき、俊雄の男らしい横顔に胸がときめいた。サラサラの女性のような髪に隠れた優しい瞳。プリントを持つがっしりとした男らしい手。そのギャップに気がつき、私はドキドキしていた。

あれが、俊雄に恋に落ちた瞬間だった。

告白は、俊雄からだつた。ゴールデン・ウィークのいつでもいいから一緒にどこかに行こうと誘われた。

それまで、デートをしたことがなかつた私は、どう返事をしていいのか困惑した。軽く「いいよ」と言えばよかったのかもしれないが、こんな経験は生まれて初めてで、しかも、ゴールデン・ウィークは空いている日のほうが多かつたので、余計にいつがいいとかいろいろと考えすぎてしまったのかもしれない。

ときまぎしながら、

「うん、いいよ」

と、蚊の鳴くような声で返事したのは、今でも恥ずかしい記憶として私の頭に焼きついている。

同じ班で階段掃除をしているときのことだった。私と俊雄は、他

の班の人たちから少し離れたところで掃除をしていたので、そういう話が出来たのだろう。

その日の帰りは、初めて俊雄と一緒に帰った。そして、遊びに行くためのつめの交渉が行われた。その日は、私の所属していた茶道部の活動はなく、俊雄の所属していた映画同好会も活動のない日だった。

ゴールデン・ウィークは、俊雄の见たい映画を見ることが決定し、デートは4月29日に決まった。今思えば、デートをすると決まった時点ですでに出来上がっていたような気がする。しかし、あの時はデートしたときに告白されるのだろうか？ 何て事を考えたりしていた。

デート当日は、朝から緊張していた。休日だと言うのに、午前5時くらいに目がさめてしまった。いくらなんでも興奮しすぎだと、枕元に置いてあるデジタル時計を見て、自分自身にあきれたほどだ。もう一度、布団にもぐり、その日は気持ちよく二度寝した。

次に起きたのは、母にたたき起こされた。目覚し時計をセットしたのに、全然起きる気配がなかったらしく、母が私を起こしてくれたそうだ。

余裕を持って目覚し時計をセットしていたので、別に問題はなかった。デート当日なのだから、余裕を持って行動できるようにしておこうと前日の夜にイメージトレーニングをしていたのだった。

緊張していたけれど、朝食はいつも以上に食べたと思う。普段は、ご飯と味噌汁を軽く食べる程度なのだが、その日はおかずもしっかりと食べた。そのときに思ったのが、私はストレスで食べてしまう人なのだとということだ。決して、私は拒食症にはならないのではないかとさえ思った。

待ち合わせのターミナル駅までは、一人で行った。家を出た瞬間から、私の体は緊張に包まれた。俊雄とは、学校で二人きりになったことがあったのに、なぜだろう、学校の外で二人きりで会うと思つと鉄のように体が硬直してしまいそうなほどに緊張してしまうの

だった。

家から駅までの道のりは、遠いようで近かった。十分程度歩くのだが、その日に限っては五分も歩いていないような感覚だった。歩きながら、もしも会話が続かなくなったら？ だとか、気まずい雰囲気になっただら？ だとか、嫌なことばかりを想像していたのだった。

待ち合わせ場所につくと、休日と言うこともあってか人でいっぱいだった。しかし、俊雄はすぐに見つかった。正確に言うと、俊雄が私をすぐに見つけてくれたのだった。笑顔で手をふり、私に近寄ってきた俊雄。知っている顔を見た瞬間に、緊張の糸は自然とほぐれてくれた。

それからすぐに、俊雄が見たいと言う映画を上映している劇場へ行き、チケットを買った後に長い列に並んだ。テレビでも何度も取り上げられるほどの大人気映画で、カップルも多数列に並んでいるようだった。私たちは、階段の途中に並んでいた。私は、ひんやりとした手すりに寄りかかって長蛇の列を他人事のように物珍しそうに見ていた。

「すごい人だね」

俊雄は、あまり沈黙を作らないように気を使っていたように思う。私の視線の先を予想しているのか、私が興味を持っているようなことばかりを口にしていた。

「うん。どこまで並んでいるのかと思って下を見たんだけど、列の最後尾が見えないんだ」

デートだと言うのに、茶色いパンツをはいてきた私は、階段から身を乗り出して、列の最後尾を探していた。

列が動き出すと、微妙な距離を保ったまま、私たちは移動した。手をつなくでもなく、視線を合わせることもなく。

さすがに、隣同士に座ったが、座ってからもお互いにまともな目を合わせたりすることはなかった。そして、その微妙な雰囲気のまま映画は始まってしまった。

大型巨編の洋画だった。悲しいラヴ・ストーリーで、最後の方で私は涙を流してしまった。泣くポイントはいくつかあったのだが、私は泣かないようにとずつと我慢していた。だけど、最後の泣くポイントでは我慢が出来なかった。それまで溜め込んでいた涙を全部流すかのように、私の目からは次から次へと涙があふれ出て、頬を伝った。急いで膝に置いてあるかばんからハンカチを取り出そうとすると、俊雄がポケットからハンカチを取り出して、私に差し出してくれた。真っ白いハンカチだった。素直に受け取り、俊雄のハンカチで涙を拭った。

映画が終わり、劇場近くの喫茶店にでも行こうと思ったのだが、どこも混んでいて空いてなかった。せつかくのデートなのだから、もう少し俊雄と一緒にいたい。仕方なく、喫茶店は諦めて、繁華街を抜けたところにある公園へ行った。休日だからだろう、公園にはカップルや友達同士といった人たちが数人いた。

空いているベンチに十数センチほど間隔をあけて座った。最初は、映画の話題で盛り上がった。

「ハンカチは、洗って返すよ」

私はそう言ったのだが、俊雄は、「いいよ」

とって、私が手に持っていた白いハンカチをパツと取り、自分のポケットに乱暴に仕舞った。取り出したときは、丁寧に折りたたんであったのに。

そこから急にムードは一変した。私と俊雄の間に、今までに感じたことのない空気が流れる。異性が、目の前にいる。

俊雄は、俯いていた。その横顔を私はじつと見つめていた。俊雄の頬は、少し赤くなっていた。何かを言いたげな唇。今にも動きそうなのに、なかなか動かない。何を言いたいのか、もしかしたら、期待していたことだろうか、いろいろなことを私は想像した。

数分後のことだったと思う。ようやく、俊雄の唇がはつきりと動き出した。

「あのさあ……俺と、付き合わないか？」

まったくこちらを向かなかったのは、俊雄にとって一世一代の告白と言う感じだったのだろう。俊雄の頬は、より一層赤くなり、このような頬になっていた。サラサラの前髪が邪魔して、俊雄の目は見ることが出来なかったが、唇がかすかに震えていたのは覚えている。

俊雄から告白されたら、OKするんだと思っていた私だが、さてどうやって返事をしたらいいのだろうか。返事の仕方までは考えていなかった。

「う、うん……」

物を飲み込むような声で返事をした。俊雄がこちらを見ていないのはわかっているのに、なぜか頷いて。

胸の前で両手を握り締めて、俊雄がこちらを見るのを待った。私が返事をする、俊雄は一つ唾を飲み込んで、ようやく私の顔を見た。こわばった表情で私の顔を俊雄はじっと見つめた。そして、にっこりと口角をぎゅっと上げて笑い出した。

そのときから、私と俊雄はずっと付き合っている。毎年、お互いの誕生日は一緒にいようと決め、実際にそうしていた。

なのに、今年は一緒にいられない。節目の年なのに。私の方が2ヶ月お姉さんで、2カ月後には俊雄だって節目の年を迎えると言うのに。

今年は、絶対に一緒にいたかった。そして、高校生のときの告白のときのように甘酸っぱい気持ちで俊雄からのプロポーズを期待していたのに。十年以上付き合っているんだ。そろそろ、言ってくれてもいいだろうと期待していたのに。

目の前に置かれている冷えたお茶を一気に飲み干した。お茶は冷えたまま、私のど元を通り過ぎていった。一瞬身震いし、明日は俊雄と一緒にではないと自覚した。

誕生日会の悲劇

一人で迎えた誕生日の朝は、ひどく晴れていた。目がさめるとベッドから起き上がり、自分の部屋のカーテンを開けると、抜けるような青空が私の瞳を刺した。痛いくらいに強い光。痛いのは瞳だけではなく、心もそうだ。

すぐに支度を整え、軽い朝食　昨日の夜に作っておいた豆腐の味噌汁とご飯　を済ませ、満員電車へと向かった。マンションを出ると先ほどと同じく、強い太陽の光が私を出迎えた。まったく嬉しくない三十歳の誕生日を祝ってくれているのだろうか。

「誕生日おめでとう」

先に会社に来ていた同僚の倉持重行が向かいの席から挨拶した。だるい声で、

「おはよう。覚えてたんだね」

とだけ言い、自分の席についた。

パソコンの電源を入れながら、俊雄のいない誕生日をどうやって乗り越えようか考えていた。いまだに俊雄が今日、会ってくれる様な気がしてならない。定時が過ぎる頃に電話がかかってきて、「これから会おうよ」と、呑気な声で言ってくれるような気がするのだ。俊雄のことだから、私を驚かせようとして、今日は会えないと言ったと考えることだって出来る。そうだよなって、自分に言い聞かせていると、パソコンが起動した。

メールのチェックを真つ先に行った。今日が私の誕生日だと知っている人は社内によく、新着メールは二桁になっていた。二桁と言うのは特に異常なことではないのだが、今日のメールはいつもと違ってプライベートなメールがとても多い。

誕生日おめでとう！いくつになったの？

ハッピーバースデー！

等等など、いろいろなメールが届いていた。

みんながこれだけ祝福してくれるのは、毎年、自分の誕生日を回りに言いふらしていたからだろう。今日、誕生日だと言つても何も言わない人もいたけれど、大抵の人は「おめでとう」と言い、誕生日祝いに食事に行こうと誘われたこともあった。もちろん、食事は断った。俊雄が最優先だからだ。俊雄だって、私の誕生日を最優先してくれていた。

だから、今日も他社で働いている恋人と食事に行くのだろうと、誰もが思っているらしく、昨日まで誰からも食事の誘いをしてこなかった。私自身、昨日まで今日は俊雄と食事をすると当たり前のように思っていた。

メールのチェックを念入りに行っていると、向かいの席から、

「俺のメール、見た？」

「え、まだ見てないよ」

まだ、倉持君からのメールは見ていなかった。他の人のメールを見ていたのだが、倉持君から話し掛けられたので、急いで倉持君のメールを見ることにした。

誕生日、おめでとう！

今日も彼氏とデートかな？

うらやましいなあ。

早く自分のメールを見て欲しがっていたわりには、あっさりとした内容だ。

「見たよ、メール」

一通り倉持君からのメールを読み終わると、倉持君に話し掛けた。「あ、見た？ 今日も彼氏と食事でしょう？ いいよなあ。幸せな

人は」

すぐに、「今日は彼氏と会わない」と言ってもよかったのだが、周りには他の社員もいるので、声に出して言うのはやめた。

「毎年、誕生日に恋人と会えるなんて、うらやましいねえ」

隣の席の古株の江副さんが、腕を組み、目を細めた。みんな、昨年までの誕生日に、私が浮かれて彼氏とデートするんだと言っていたことを覚えているようだ。皮肉にも、皆、過去の私の誕生日を覚えていたとは。

倉持君には、正直に今日の予定を知らせることにした。

今日は、彼氏と会えないんだ・・・
一人ぼっちの寂しい誕生日だよ

メールを送ると、すぐに倉持君が読んだらしく、パソコンの画面を見ていたと思ったら、すぐに頭を上げてメールの内容を確かめるように私の顔を見た。毎年、誕生日は彼氏と一緒にだと言っていた人間が、違つと言ったことに驚いているようだ。昨日の夜、私が一番驚いたけれど。

じゃあ、同期のみんなで誕生日パーティーでもしようよ！

作業をしようとパソコンを見てみると、倉持君からの返事がきていた。同期のみんなと・・・か。それもいいかもしれない。他のみんなが来てくれるといいけれど。

私と倉持君は、同じ総務。同期は他に二人いるけれど、二人とも開発だ。開発の二人はいつも忙しいらしく、今日、私の誕生日パー

ティーに来てくれないのではないか。

もしかしたら、倉持君と二人きりだとか、中止するかもしれない。しばらく自分の作業をしていると、倉持君からメールがきた。開発の一人は無理だと断られたが、一人は行けると連絡があったそうだ。私と倉持君は、定時で会社を出た。もう一人の誕生日会の参加者である氷室恭子は、途中から参加するので、会社の近所で倉持君と二人で飲むことにした。なぜ、飲むか……。私がそういう気分だからだ。俊雄が誕生日を祝ってくれない現実を受け入れられないからだ。どこに行きたいかと倉持君に尋ねられて、居酒屋で飲むと私が提案したのだった。

駅近くの雑居ビルの地下にある店に入った。以前、同期の四人で来たことがあり、ここなら恭子も場所がわかるので、二人で決めた。窓のない店内は、どこか艶かしく感じる。オレンジ色の間接照明に照らされた木目のテーブルが、温かさ艶かしさの両方を演出している。

四人がけのテーブルに案内され、私と倉持君は向かい合って座った。壁を照らす間接照明の光が、かすかに倉持君の顔を撫でている。普段、社内で見える倉持君とは別人のように見える。

「恭子、早く来てくれるといいんだけどね」

ため息混じりにそう言った。メニューを私に見せようと倉持君がテーブルの端にあるメニューを私に渡そうとしたが、適当に倉持君を選んで欲しいと頼んだ。今は、食べたいものが頭に浮かんでこないのだ。仕方がないと口には出さなかつたけれど、倉持君は一つ肩で息をすると、メニューを開いて目を忙しく動かし続けた。

店員が水を出し、「ご注文は？」と私たちに問うてきた。倉持君がメニューを店員に見せながら次々と注文していく。飲み物のところで、私に「何が飲みたい？」と聞いてきた。私は躊躇なく「梅酒サワー」と応えた。

注文を終えると、倉持君は私に向き直った。

「誕生日、おめでとう」

それは、心の底から言っているように思えた。目をランランに輝かせ、背筋を伸ばし、しっかりとほつきりとした口調で私に力強く言ったのだ。

本当は、素直に喜んでいいのか迷っている。もう二十代ではないのだ。ずっと二十代と言いつづけたかった気持ちが残っており、今日を受け入れたくない気持ちでいつぱいなのだ。しかし、倉持君の純粹な心を傷つけるのも悪いので、

「ありがとう」

と心からの返事をした。

しばらくすると、注文した料理でテーブルが埋め尽くされた。倉持君の目の前に枝豆が置かれ、私の目の前にモズク酢が置かれた。他にも揚げだし豆腐や肉じゃがなんか並んでいる。

今日と言つ日を忘れるかのごとく、私は料理を食べ始めた。モズク酢を一気に食べ、揚げだし豆腐をハフハフ言いながら食べた。

目の前で、私の様子を見ていた倉持君が「まあまあ」と制してくれたのだが、そんなことはお構いなしに、今度は梅酒サワーを一気に飲み干した。半分呆れ顔で倉持君が、もう一杯梅酒サワーを頼んでくれた。

手を動かしながらも頭の中では、今ごろ俊雄はどこで何をしているのだろうか？ そればかりを考えていた。私の記念すべき節目の誕生日を祝わないで、どういつつもりなのだろう。本当に忙しいのかもしれないけれど、時間が遅くなってもいいから一目、今日だけはどうしても会いたかったのに。

アツアツの肉じゃがを口に入れ、熱さと寂しさで目に涙がたまった。すぐに気がついて、倉持君がテーブルの上に備え付けの紙ナプキンを一枚取って、渡してくれた。

「春日さんらしくないな。ゆっくり楽しみながら食べようよ」

そうだよ。心の中でつぶやいてみた。今日は、私の誕生日なのだから楽しんで食事をするべきだろう。だけど、頭が体がそれを拒んでいる。苦しむ心を癒すために、私は忙しく食べ続けてしまった。

そして、いつも以上にピッチを上げて飲んでる。俊雄のことを考えると、手が、口が止まらない。

「恭子、まだかしらね」

冷静を装うかのように、言った。

「今、忙しいみたいだから、まだじゃないかな？」

倉持君の言葉を飲み込むように、梅酒サワーをまたも飲み干した。今日は、何杯お酒を飲むことになるのだろうか。

どんどんお酒を飲み、どんどん注文した。恭子が来る前に、酔いつぶれてしまっただろう。それでも言い。今日は、とことん飲みたい気分なのだ。酒の肴を食べ、お酒を飲む。その繰り返しの間、倉持君に愚痴をぶつける。嫌な酔っ払いそのものになりきっている。「好い加減にしろって。大分、酔ってるんじゃないのか？」

何杯目だろう。私がお酒を注文しようとすると、倉持君が制止した。「良いじゃない。今日は、私の誕生日なのよ？好きなだけ飲ませてよ」

そう言っ、私は倉持君の制止を振り切った。倉持君は青ざめた顔をしている。本当は、倉持君の言うとおりで、もうこれ以上飲まない方がいい。酒の肴だつて段々つままなくなつてきている。愚痴を言いながら、お酒を飲むの繰り返しだ。

「おまたせ！」

ようやく恭子が店に到着した。申し訳なさそうに、テーブルとテーブルの間をすり抜けて私たちのいるテーブルに着くと、

「ごめん！遅くなつて」

慌てて言つと、空いている私の隣の席に座つた。いそいそと荷物を降ろし、落ち着かない様子でメニューから飲み物を探し始めた。恭子が隣で自分の酒を探してもお構いなしに、私はジントニツクを飲み続けていた。

すでに、酔っ払いと化していることに気がついていた。自分の視点が定まっていけないのに、自然とグラスを口元に動かしている。目の前にいる倉持君は私の状況に気がついているようだ。さっきから

ずっと私を心配そうに見続けている。

恭子が自分の飲み物を注文した。そこで、ようやく恭子も私の異変に気がついたようだ。

「ちよっと、飲みすぎじゃない？ 目が据わってるよ」

目が？ その言葉を聞いて、自分が思っている以上に酔いが回っていることを認識した。

「そう？ ちよっとトイレに行ってくる」

トイレに行くと言うことは、立ち上がって自分の体の状態を知ることが出来る。今の私の体がどれだけ私の脳の言うことを聞くのかを試したかった。ゆっくりとテーブルに手をかけて椅子をひき、立ち上がってみた。それほどふらついたりもせず、これならまだまだ飲めるだろう。次に、ゆっくりと左足を動かしてみる。そして、右足も。椅子から離れたところで、体が思った以上に言うことを聞いていないことを自覚した。まっすぐに歩いていない。少し蛇行しながらも他の客のいるテーブルに接触することなく無事にトイレに到着した。

トイレには、誰もいなかった。用を足して、洗面台の前に悠然と立った。手を洗いながら鏡に映る自分の顔を見てみると、頬を真っ赤に染めた自分が写っていた。トイレの薄暗い照明でも頬が赤くなっていることは充分にわかる。特に頬骨のあたりがりんごのように赤くなっていた。手を洗い終わり、備え付けのジェットタオルで手を乾かすと、もう一度、鏡の前に立った。そして、右手で右の頬を触ってみる。体がぼかぼかしていたけれど、顔もかなり温かくなっていた。水で手を洗ったので、手が頬をさわった瞬間、その冷たさがとても心地よく感じられた。酔いを覚ますまでではなかったが、適度なクールダウンが出来た。

そろそろウーロン茶に切り替えた方がいいのかもしれない。いくらなんでも自分の節目の誕生日だからって、少々飲みすぎだろう。明日は平日なのだから。二人に迷惑がかかる前に、そうしよう。

トイレから戻り、すぐ近くににいる店員を呼ぶとウーロン茶を頼ん

だ。

「千里、倉持君から聞いたわよ。さつきから、飲んでばかりいたそうじゃない。大丈夫なの？」

自分でも大丈夫なのかどうか、よくはわからない。俊雄と一緒に誕生日だったらと思うと、すぐにお酒に手が伸びてしまうのだ。トイレに行き、クールダウン出来たので、これからはお酒は控えようと思えるようになった。

「もう大丈夫よ。心配しないで」

先ほど注文したウーロン茶が目の前に置かれると、すぐに半分くらい飲んだ。

同僚三人で祝う誕生会だって良いじゃないと自分に言い聞かせ、倉持君と恭子と楽しむことに専念することにした。

ウーロン茶を飲みながら、三人で他愛もない話に花を咲かせていると、いちゃいちゃしたカップルが店内に入ってきた。二人は腕を組み、女性が男性にもたれかかるように歩いている。二人ともにやけた顔をして、私たちの向かい側の席に座った。席に着いてからも二人は見つめあい、手を握ったりしている。そのカップルを見ていたら、だんだんと怒りのようなものが込み上げてきた。

「すみません、ビールの中ジョッキ一つ」

ウーロン茶を一気に飲み干すと、すぐ近くにいた店員に注文した。すると、正面の倉持君が血相を変えた顔で、

「もうやめたほうがいいって！」

と訴えたが、私はその言葉に耳を貸すことなく注文した。倉持君の言いたいことはわかってる。だけど、今日は私の誕生日だ。そう聞き直ると、もう私を誰も止めることなんて出来ない。

「千里ったら、大丈夫なの？」

恭子の言葉も右から左へと流れていくだけだった。

相変わらず、向かい側のカップルのいちゃいちゃぶりが視界に入り、私はその度にビールを一口、また一口と飲むのだった。悪い女性客そのものと言わんとばかりに、ビールを続けざまに注文しては

飲むの繰り返し。

「どうして、俊雄はデートを断ったのかなあ。今日が私の誕生日だって知ってるのよ。毎年、誕生日にデートしてるのに、どうして今年はずったのよ」

「彼氏だって忙しいんだから。仕方がないじゃない。今年は、私たちがお祝いしているんだからさ」

恭子が私の愚痴を聞いては、泣いている子供をなだめるように私に語りかけてくれた。

「本当は、浮気でもしてるんじゃない？」

酔った勢いで俊雄を疑うような言葉が口からこぼれた。

「まさか。毎年、必ずお祝いしてくれていたんだから、それはないんじゃないかな？」

同じことを繰り返し愚痴っているにもかかわらず、倉持君は同じ言葉ではあるが、俊雄を擁護することを言ってくれた。

私だって、俊雄を信じたいよ。信じたいけれど、いつもの年と違う誕生日にさせた俊雄をどうやって信じたらいいのかわからない。

信じたいのに信じられないと思うと、ついついお酒に逃げてしまうのだ。

今日は、何杯ビールを飲んだことだろう。他のお酒を入れたらかなり飲んだのではないかと思う。

明日があると言うことで、十一時を過ぎたところでお開きにすることになった。帰り支度をしようとしたのだが、体が言うことを聞いてくれなくなっていた。自分のかばんを拾い上げようとしているのに、うまくいかない。

「ほら、もう自分のかばんも取れなくなってるの？」

呆れ顔で恭子が私のかばんを取ってくれた。流石に、今日は飲みすぎたようだ。家に帰ってすぐに寝よう。この分だと、明日は二日酔い決定だな。

立ち上がるうとすると、やはり上手く立ち上がることが出来なくなっていた。足に力が入らず、テーブルにしがみつかないと、立つ

ていられない。隣にいる恭子が帰り支度を済ませると、私の肩を持つて店の外へと連れて行ってくれた。お会計は倉持君がその間に済ませてくれた。

「千里、一人で帰れる？」

「ううん……」

しゃべることすらままなくなっていた。

倉持君と恭子が私をどうするか話し始めた。恭子が連れて帰ってあげたいが家が反対方向で、自分が家に帰れなくなってしまうと言うこと。倉持君の家は私の家と同じ沿線にあり、かなり近くに住んでいるということで、倉持君が私を連れて帰ることになった。

今度は倉持君の肩を借りて、駅まで三人で行くと、恭子とはそこで別れた。

「春日さん、大丈夫？」

「……」

倉持君が問い掛けても、私は何もしゃべらなかつた。それでも、たまに倉持君は私に話し掛けてくれた。私の最寄り駅につくと、無意識にいつも通っている道を歩き始めた。ふらつく私の体を倉持君が支えてくれ、たまに塀に体をぶつけながらも橋を渡り、商店街を抜け、寂しい路地裏にある私のマンションに到着した。玄関の前で、かばんの中から鍵を取り出すと、なかなか出てこないの、業を煮やして倉持君が私のかばんを取り、すぐに鍵を取り出すとあっさりと玄関を開けてしまった。千鳥足の私の靴を脱がせ、私の肩を担いでベッドに寝かせてもらった。倉持君がいるというのに、私はベッドに大の字になった。

「鍵、枕元に置いておきますよ」

「……」

耳では倉持君の言葉を聞いているのだが、酔いが回っていて口が動かなかつた。服を着たままベッドの上で大の字のまま眠りに入るうとしていると、倉持君が私の上に馬乗りになりキスをしてきた。

心臓が止まりそうなくらいに驚き、ただでさえ体が上手く動かな

いのに金縛りにかかったように私の体は硬直した。そして、そのまま倉持君に抱かれてしまった。

次の日の朝、倉持君が同じ服で出勤するわけにいかないと言い、朝早く自宅に帰った。

一人、家に残り、二日酔いでひどい頭痛がする中、昨日の夜のことをベッドの中で思い返してみた。居酒屋では見るに耐えかねるような酔っ払いと化し、倉持君に家まで送ってもらって。あんなにぐだぐだに酔っていたのに、完璧に昨日の夜のことを思い出せる。酔っていたとは言え、自暴自棄になっていたとは言え、倉持君とあんなことをすべきではなかったと、強い後悔に縛り付けられた。

一体、倉持君はどんな思いで私を抱いたのだろう。そして、これからどうやって俊雄と接し、倉持君と接していけばいいのだろう。

揺れる自分

誕生日会が過ぎても、私と倉持君は何食わぬ顔で会っていた。私があの時を忘れれば、全てが元通りになる。そう信じていた。

しかし、同じ週の金曜日の帰りに事態は一変してしまう。

誕生日会后、初の休目を目前に、ようやく俊雄と明日会えることを喜び、仕事が終わると、足早に会社から出ようとしていると、会社が入っている雑居ビルの入り口に倉持君がいた。

「何、誰かと待ち合わせ？」

他人事のように、気軽に倉持君に話し掛けると、

「いや、千里を待っていたんだよ」

ち・さ・と？

今まで、倉持君にそんな呼ばれ方をしたことがなかった。よく考えてみると、誕生日会后、倉持君と二人きりになったことはなかった。あの日以来、倉持君の中では何かが変わっていたのかもしれない。

困惑し、呆然と雑居ビルの入り口に立ち尽くし、倉持君の顔を見つめた。

「ど、どうしたのよ。いきなり名前で呼ぶなんて」

顔を引きつらせ、落ち着かない自分を落ち着かせるように言った。倉持君は余裕の構えで、

「ここじゃ何だから、場所を移そう」

倉持君に促され、困惑したまま会社を後にした。

「急にどうしたって言うのよ。態度を変えちゃって。社内と全然違うじゃない」

冷静な声で言っただけに見たものの、内心、倉持君が何て言うかと思うと気が気じゃない。まさか、倉持君はあの夜以来、私のことを恋人として見ていたのだろうか？

「社内で突然、態度を変えたら、他の人たちが怪しむだろ？ それ

に、今じゃ俺たちはただの同僚じゃないじゃないか」

倉持君は、すっかり同僚から恋人同士のような口調に変わってしまっている。

「ただの同僚じゃないって……」

「だって、そうだろ？」

言われてみれば、確かにそうだ。しかし、それは私が望んだものではない。倉持君が、一方的に望んだことだ。なのに、私を無理やり倉持君の思う道に引っ張っていかうとしている。私の気持ちを無視している倉持君の態度に、だんだんと苛立ちを覚えてきた。

「そうだろじゃないわよ。何がただの同僚じゃないよ。倉持君が勝手にしたことじゃない」

「確かにそうだけどさ。でも、もう昔の俺たちではないことは確かだろ？」

興奮しているからか、だんだんと歩く速度が速くなっていく。妙に冷静に話している倉持君に、強い憤りを覚えながらも駅に向かった。

「食事でもしようか」

誕生日会で行った居酒屋の前に来ると、倉持君が誘ってきた。

「お酒を飲みたい気分じゃないから」

アルコールを今の私の体に入れてしまえば、誕生日の夜の再現をしてしまう可能性だってある。絶対にそれだけは避けたい。

居酒屋に行くのはやめて、居酒屋から少し離れた場所にあるパスタ専門店に入ることにした。夕食時で、店内はかなり混雑していたので、しばらく入り口脇にある椅子に座って待つことになった。

「そう怒るなよ」

倉持君と隣同士に座ったが、私は倉持君と体がぶつからないように注意して座り、腕を組んで緊張した顔をしていた。

私を怒らせた張本人の呑気な言葉に、より一層、強い怒りが湧いてきた。倉持君は自分のことばかりで、私の気持ちに気付こうともしない。自分がしたことがどういふことなのか、まるでわかっ

ないようだ。

「怒られるようなことをしておいて、よく言うわよ」

私の頑なな態度に、倉持君は口を閉ざした。

しばらくすると、店員に促されて席に案内された。

一番奥の角の席に案内された。隣の席と少し間隔が広く空いており、通路には観葉植物が置かれている。

「ちよつとやりすぎたかもしれないけどさ。そこまで怒らなくても……」

椅子に座ると、開口一番に倉持君がささやくように言った。

「よく言うわよ。れっきとした、準強制わいせつしておいて」

「シーツ！」

流石の倉持君も”わいせつ”と言う言葉でかなり動揺したらしい。急に貧乏ゆすりをし始めた。額には冷や汗をかき、目の前にあるお絞りで汗を拭った。

「まさか……、訴えるのか？」

私が訴えれば、倉持君は捕まり有罪判決を受けるだろう。もちろん、抵抗が出来ない状態で無理やりされたのだから、いい気なんてするわけがない。ただ、倉持君のことは同期入社で一番近くで働いてきた人だ。そこまでするべきかどうか。もし、倉持君を訴えたら、周りにあの日のことがばれてしまうのではないか。そうなれば、私だってあの会社にいづらくなってしまうだろう。

「怖いのか？」

力なく倉持君は一つ頷いた。

「訴えはしないわよ。私の立場まで危うくなりかねないしね」

ホツとしたのか、倉持君の表情が元に戻って強気な態度に出た。

「脅かすなよな。びっくりしたよ。それより、彼氏とはどうなんだよ」

「彼氏って、何よ突然」

念のために牽制球を投げ込んだ。今日の倉持君は何かを企んでいるような気がしてならない。何を企んでいるのかはわからないけれど

ど、黒くよんだ空気を倉持君は放っている。

「彼氏と上手くいってるかどうかだよ。毎年、必ず会っていた彼氏が急に会わないって言うのも変だなんて思ってた。もしかしたら、上手くいってないんじゃないかと思って。ずいぶん長く付き合ってるんだろ？」

私の動きを制するように、倉持君は強い視線を私に送り続ける。

「高校生のときからよ。それで？」

絶対に負けられないと思い、私も強気な口調で言った。

「高校生のときからって、もう10年以上になるだろ？ それで、まだ結婚してないって言うのはどういうことなんだろうな？」

それは私自身が一番気にしていることだった。

俊雄は、私と結婚する意志があるのかどうか。もうそろそろプロポーズがあってもおかしくはない。だけど、俊雄はまるで結婚から逃げるようにしている。私が教会だの、結婚式場の近くへ行こうと誘っても全部拒否されてしまった。私との付き合いを俊雄は、どう思っているのだろう。

私は、俊雄といずれ結婚することを強く望み続けた。その思いは、現在進行形だ。ずっと俊雄の傍にいたい。その温かい瞳に抱かれて、その優しい声に心をときめかせ続けたい。

もうすでに空気のような一緒にいて当たり前のような関係になっている私たち。だからこそ、俊雄のプロポーズを待ち続けているのだ。俊雄への強い気持ちが必要ならば、ここまで辛抱強く待ち続けることなんて出来なかつただろう。他の人では比べ物にならないほど、安心出来る存在なのだから。

注文したナスとミートソースのスパゲッティが運ばれた。倉持君の前にはペペロンチーノが置いてある。店員が去ると同時に、倉持君がパスタを食べ始めると、私も食べ始めた。

「春日さんは、彼氏と結婚する気はあるの？」

私が注意したからだろうか、倉持君が呼び方を変えた。ペペロンチーノを食べながらも、倉持君は真剣な表情を私に見せる。

「あるわよ」

半ばむきになって応えると、

「彼氏のほうは、どうなのかな？」

と、すぐに倉持君に聞かれた。

俊雄の気持ち。知りたいけれど、知りたくない。知らないほうが幸せなのかもしれない。もしも、俊雄の気持ちを知ったら、素直な今の気持ちを知ったら、私たちの関係はどうなってしまうだろうか。どうして、そんなことを聞くのよ」

「もし、結婚しないっていうのなら、俺と付き合って欲しいと思っ
てさ」

私が倉持君と付き合う？

「冗談でしょ？」

そう言って、本当に倉持君の言葉を冗談にしようとした。

「本気だよ。少なくとも、俺には結婚願望がある。よく考えてみて欲しい。結婚する気のない男と付き合い続けるのが得策か。それとも、結婚願望のある男と付き合って幸せな家庭を築くのが得策か」
まじめな顔で、食べる手を休めて、倉持君は私の瞳の奥を見つめている。私の心を抉ろうとしているようだ。本当に抉られてしまいたい。そんな気がした。だけど、その瞳から私は目をそらさなかった。

「幸せな家庭って、簡単に言うけど、例えば、私と倉持君が結婚したところで、幸せな家庭が築けるかどうかはわからないわよ」

心臓がドクンドクンと強く脈打つのを諭されまいと、平然とした口調で言い放った。

「春日さんは、結婚したいんだろ？ 中途半端な恋人関係を今の彼氏と続けて、不安じゃないのか？」

まるで私の心の中を全てのぞきこんだかのような台詞。まさしくそれが、今の私だ。俊雄との将来を不安に思っている。私が望むものと、俊雄が望んでいるものが違っているのだ。きっと、俊雄はただ結婚する気はない。まだまだ、自由の翼を広げて、大空を飛び続けたいのだから。

私は俊雄と落ち着いたささやかだけど幸せな家庭を持ちたい。二人の相反する思いは、どこへ向かっていくのだろう。

「よく考えて欲しいんだ。俺とだったら、結婚はすぐ目の前にあるんだってことを」

「相手が誰でもいいわけじゃないわ」

食べながらも、即答した。私には俊雄じゃなくちゃ駄目なんだ。と思うのに、弱気な心が見え隠れしている。

「俺、ずっと春日さんのことが好きだったんだよ。いつか、春日さんが俺のほうを見てくれる日が来ないかと待ち望んでいたんだ」

全く倉持君の気持ちに気付かなかった。単なる同僚としてしか見ていなかった。でも、倉持君は私を一人の女性として見てくれていたようだ。心の中は、赤や青や黄色などいろんな絵の具を混ぜ合わせたかのように、複雑に感情が絡まり合っている。倉持君の気持ちをどう受け止め、どう接していけばいいのだろう。

パスタを食べ終わると、すぐに店を出た。

外に出ると、ひんやりとした涼しい風に包まれた。

何も言わず、倉持君は歩き始めた。どこへ行くのか訊ねても返事がないので、仕方なく私もついていくことにした。倉持君は、会社とは反対側の道を進んだ。普段通らない道で、何があるのか見当がつかない。私たちは、どこへ向かっているのだろう。

だんだんと人気がなくなってきた。怪しげな看板がこちらこちらに見えてきた。風俗らしき店があるらしい。まさか！

「ねえ、倉持君」

嫌な予感がしてきた。私の背筋に一筋の冷たい粒が流れ落ちた。無言で突き進む倉持君の表情は、能面のように無気味に見えた。

突然、グイと腕を強くつかまされると、男の強い力でラブホテルへと連れ込まれそうになった。

やはり、そうだった。倉持君は私をラブホテルへ連れて行くこと思っていたのだ。

「やめてよ」

火事場のバカ力が出たようで、倉持君の腕を振り解いた。しかし、すぐにまた腕を強くつかまれる。

「良いじゃないか。一度も二度も同じようなものだろ？」

「冗談じゃないわよ。私の気持ちも知らないでそんなこと言わないで！」

必死で倉持君から逃れようとしていると、ラブホテルから一組のカップルが出てきた。

嘘でしょう？

そこにいたカップルの男性は、俊雄だった。隣には見たことのない女性がいる。しかも、腕を組んで、仲良さそうに寄り添っている。俊雄と私は目を合わせ、体が膠着してしまったようだ。

「どういうこと？」

俊雄に聞いた。だした。

「そっちこそ、どういうことだよ」

俊雄の隣にいる女性が、なにやら俊雄に耳打ちをした。すると、俊雄はそのまま女性と繁華街の方へと消えてしまった。

全身から力が抜けてしまいそうだった。

信じられない。俊雄が、浮気をしていたと言うこと？

「春日さん、今の人って、もしかして……」

私の背後から、倉持君がか細い声で聞いてきた。

「ごめん、一人にしてくれないかな」

そう言っつて、来た道を一人で戻ることにした。

強がらない心

次の日、私は俊雄の家に行った。昨日の夜、あんな気まずい別れ方をしたけれど、俊雄との関係を戻したい一心で、藁をも掴む思いでいた。

俊雄のマンションは私の住んでいるマンションと同じ沿線にある。時間に直しても三十分とかわからないだろう。おとし、私の弟が結婚し、両親と同居することになり、逃げるように私は実家を出た。本当は、俊雄に「一緒に暮らそう」だとか「結婚しよう」だとか言う言葉を言っただけだった。しかし、それらしい言葉を何も言わず、私は一人暮らしを選択した。

せめて俊雄と同じ沿線で暮らしたいと思い、今のマンションに決めたのだった。

俊雄の部屋は、相変わらず綺麗に整っている。雑誌が床に散乱するようなことはなく、マガジンラックに種類別に本が並んで置かれ、テーブルはいつ来ても全く同じ場所に置かれている。

私を中に通すと、俊雄は顔色一つ変えず、冷蔵庫からお茶を出してくれた。

何から話せばいいのだろう。

正面に俊雄が座り、この部屋に沈黙が走った。

俊雄がお茶をすすする音が響く中、何を話せばいいのか迷い続けている。俊雄は、私とは目を合わせようとしてくれない。

「ねえ」

「ん？」

窓の外を見ながら、俊雄は気のない返事をした。

もう駄目かもしれない

最悪な出来事が、私の脳裏に浮かんだ。

「昨日、女性と一緒にいたけど、あの人は誰なの？」

「・・・・・・・・・・」

あぐらを組み、俊雄は窓の外を眺めるだけだった。

「私の誕生日もあの人と一緒にいたの？」

墓穴を掘るような質問。しかし、沈黙に耐えられなくて思わず口をついて出てしまった。

「ああ」

やはり、俊雄は私の誕生日を他の女性とすごしていたのだ。なぜ、俊雄はそんな行動をとったのだろう。

「あの人のことが、好きなの？」

すると、俊雄がこちらに体を向け、真剣な表情で私の顔を見た。

「あの人は、俺の元上司だ。彼女は結婚して子供もいる」

「つてことは、不倫じゃないの」

「そうだな。千里は気がついていたかもしれないけれど、俺はまだ結婚したいと思っていななんだ。でも、千里は結婚したような感じがした。それで、彼女に相談したんだ。そうしたら、何時の間にかああいうことになって……」

耳を塞ぎたくなった。私の結婚願望が俊雄のプレッシャーとなっていた。そして、その結果、不倫してしまったのだ。

「彼女とは、今後、どうするつもりよ」

「いずれ、別れなくてはならないって思っているよ。それより、千里の方はどうなんだ？ 昨日、男と一緒にいたけど。あの男が、確か『一度も二度も同じ』だとか言ってたじゃないか。それは、どういふことなんだよ」

半分開き直った表情で、俊雄が反撃を開始した。

俊雄に嘘はつきたくない。私は、正直に誕生日の夜のことを話した。

「私は望んでなんていなかった。彼が一方的にしたことよ」

暗い影が私たちを飲み込んだ。俊雄は俯いたまま、何も話さない。しかし、その肩はかすかに揺れているように感じた。

「何か……言つてよ」

俊雄に何か言つて欲しい。黙つて私の話を聞くだけじゃなく、何

か私に話して欲しい。

窓の外に視線を向けながら、俊雄は口元に手をやった。困ったときは、いつも口元に手をやるのが俊雄のくせだ。今、私にどんな言葉をかけようか迷っているのだろう。

「ごめんな」

俊雄の謝罪をどんな意味で受け取ったらいいのか、よく理解できなかった。

私が俊雄の顔をじっと見つめていると、

「あの日、俺と会っていたら、こんなことにはならなかったんだろ？」

横目で俊雄が私の方を見たので、小さく頷いた。

「辛かったか？」

俊雄がこちらを向いて、心配そうな顔で聞いた。

「あの時、お酒を飲みすぎていなければって今でも思う。体さえ動いていれば、彼を拒むことは出来たから」

あの夜のことを思い出し、私は俊雄から目をそらした。

あの日から、私は誕生日の夜のことを何度も忘れようとしてきた。だけど、忘れることが出来ずにいる。あれだけ体が自由に動かせなかったというのに、どうして頭ははつきりしていたのだろう。それだって回っていないなかったのに、記憶ははつきりしている。

嫌だった。同僚としか思っていない倉持君の行為が、憎たらしい。しかし、自分にも責任はあった。俊雄と会えない事を理由に飲みすぎたのは自分の責任だ。

顔をあげると、私をまっすぐに見つめる俊雄の顔があった。何か言いたそうな唇。もごもごと動きそうで、なかなか動かない。

「俊雄？」

「俺は情けない男だな。プレッシャーから解放されようと浮気して、その上、千里を傷つけてしまったんだからさ。本当に、情けないよ」

俊雄の肩が、がたがたと震え出した。涙をこらえているのか、唇を強くかみしめている。

「私の方こそ、プレッシャーを与えすぎてしまったようなね。一方的になりすぎたのよ」

強く唇をかみしめたまま、俊雄は首を大きく横に振った。

「俊雄の気持ちも考えないで、自分の気持ちだけを俊雄に押し付けていた。俊雄は、まだ結婚したくなかったんでしょ？」

俊雄は、一つ息を飲むと口を開いた。

「確かに、まだ結婚したいと思っていなかったよ。千里とはこのままの関係を続けていきたいって思っていたんだ。このまま、千里とずっと一緒にいられたら、それでいいって。そう思っていたのに、どうして浮気なんてしたんだろうな」

最後の方は、涙声になっていた。

今、俊雄は強い後悔の念に押しつぶされそうになっている。私との心のすれ違いから、お互いが傷つけ合ってしまったのだ。

もう何もなかった時には、戻れない。忘れたくても全てを忘れることも出来ない。

「私たち、これからどうなるのかな？」

つぶやくように言った。俊雄は、黙ったままだ。下を向いて、涙をこらえ続けている。

「ねえ、覚えてる？ 俊雄が、私に告白してくれたときのことを」
今まで生きてきた中で、一番嬉しかった瞬間のことを私は思い出していた。俊雄と付き合い始めた瞬間のことを。

「ああ、覚えてるよ」

潤んだ声で、俊雄が言った。

「初めてのデートの時だったな。絶対に、千里と付き合いたいと思って、あの時は必死だったよ。もしも断られたらって思ったりもしたけどさ。勇気を出して、告白してよかったよ」

うつすらと笑顔を浮かべながら、俊雄はあの日のことを思い返して私に話してくれた。

「告白のときは、心臓が止まりそうなほど緊張したよ。だけど、千里がOKしてくれた途端に、全身の力が抜けていったんだ。あのと

きの感触はいまだに残っているよ。千里とずっと一緒にいられて、本当によかったよ。これから先も、ずっと千里と一緒にいられておごりが、今の俺のどこかにあったんだろう」

また、俊雄は真剣な顔をした。

私に告白してくれたときのことが聞けて、嬉しかった。私も俊雄に告白されたときは、死ぬほど緊張していた。だから、返事も中途半端な感じになったんだっけ。

まさか、私がOKした瞬間に俊雄の体の力が抜けていたとは。そんなに嬉しかったんだ。私の返事に、そこまで喜んでいてくれたんだ。

「あのときの気持ちを忘れていなかったら、浮気なんてしてなかったのに。どうかしてたよ、俺」

「もつと早く、こうして正直にお互いの気持ちを話す機会を作っておけばよかったね」

そう、もつと早くお互いの気持ちをしっかりと聞くべきだったんだ。自分の気持ちをぶつけていれば、ここまでお互いに傷つけあうことはなかったのかもしれない。もしかしたら、今ごろ私たちは夫婦になっていたかもしれないんだ。

「私たち、これからどうなるのかな？」

ぼつりと口に出した。

俊雄が浮気をしていたことは、とても大きなショックだ。だけど、俊雄を失うことはそれ以上のショックに違いない。まだ、俊雄の心までは離れていない。これだけお互いが傷ついているということは、お互いを想っている証拠だ。

なかなか口を開かない俊雄。俯いてばかりいる。私の心を察しようとしているのか、私が望んでいると思う応えを探しているのか。もし後者だとしたら、絶対に別れを切り出して欲しくはない。

私は、ずっと俊雄と一緒にいたい！

心の中で叫んでみる。お願い、俊雄。私の望む応えを言って。ゆっくりと顔をあげて、私の顔を見る。私の望む答えを表情から

読み取ろうとしているようだ。

「千里……。お前は、どうしたいんだ？」

俊雄には、自分で判断して欲しかった。私たちの未来像を俊雄に語って欲しかったのに、私に答えを求めてきた。私の表情からは、応えを読み取ることが出来なかったのだろうか。何年も付き合っているというのに、どうして読み取ってくれなかったのだろうか。なぜ、私に応えを求めたのだろうか。

「私は、俊雄の気持ちを知りたい。俊雄は、どうしたいの？」

「俺は……俺は……」

なかなか応えたがらない俊雄。俊雄の性格はわかっている。俊雄は、決して黙って俺についてこいとは言わない。二人で肩を並べて歩いていこうとするタイプなのだ。

そうとわかっているけれど、今回ばかりは自分で応えを導き出して欲しい。私たちの人生のことなのだから。

「浮気をした俺が、お前の人生を決めることなんて出来ないよ。俺は、千里の望むことをしたいだけだ」

俊雄らしい応え。

網戸から、冷やかな空気が入り、私たちに涼しい空気を与えてくれた。

目の前に置かれたお茶の入ったグラスは、水滴だらけになっている。水滴が落ちないように、手皿を作ってお茶を飲んだ。大きな水滴が、私の左手に数滴垂れた。それらはとても冷たかった。テーブルに置いてあるティッシュを一枚取ると、手を拭いてゴミ箱に捨てた。

俊雄は、黙って私の行動を一部始終見ていた。

大事な決断を私に一任し、今か今かと私の望んでいる応えが話されることを待っているようだ。

「俊雄の望む未来図を私に見せて欲しかったのに」

正直な気持ちが、私の口からこぼれた。

「……」

口を硬く閉ざし、私は首を数回横に振った。

また、俊雄が俯いた。何か考えたのか、自分の言うべき言葉が見つかったからか、俊雄は顔をあげると私の瞳をじっと見つめた。

「千里が別れたくないと言うのなら、このまま付き合い続けようか？」

とつさに私は頷いた。これで、俊雄と別れずに済む。

「そっか」

和らいだ表情で、俊雄はそう言うのと座りなおしてあぐらをかいた。「なあ、千里」

優しい声だった。俊雄の優しい声に、私の瞳にたまっていた涙が大粒の涙となつて零れ落ちた。急いで手で拭うと、テーブルの上に置いてあるティッシュの箱を俊雄が渡してくれた。一枚だけティッシュを取ると、強く目に押し当てた。

「今、言うことじゃないかもしれないけどさ。千里は、こんな俺でも結婚したいと思うか？」

一瞬、心臓が止まったような気がした。目を大きく開いて、俊雄の顔を見ると真剣な表情で私をじっと見ていた。

これって、プロポーズと言つてもいいのだろうか。私は、プロポーズと思いたい。

涙を拭いたティッシュを丸めてゴミ箱に捨てると、大きく一つ深呼吸をした。

「うん。俊雄が浮気したことはとても辛かったけど、私には俊雄が必要だと思うから」

「お前の気持ちは、変わらなかつたんだな」

その台詞を俊雄はどんな気持ちで言ったのだろう。あきれているのか、喜んでいるのか。

「俊雄にとって、私は必要？」

「……ああ」

私とは目を合わせず、頬を赤らめながら俊雄は言った。愛らしい俊雄のしぐさに、母性本能がくすぐられた。

「昨日、知らない男と千里が一緒にいるところを見て、正直、すごくショックだったんだよ。だけど、俺だって人のことは言えないなと思った。俺だって、勝手な事をしているんだって。そして、千里が俺から離れてどこか遠くへ行ってしまうような気がしたんだ。昨日は一晩中、お前のことばかりを考えていたよ。このまま千里が遠くへ行ってしまうって良いのかってね。これからも、千里には俺の傍にいて欲しいって結論が出たんだよ」

かなり照れくさそうに、もじもじしながら俊雄が言った。

ありがたいとさえ思った俊雄の気持ち。私を必要だと言ってくれたことが、嬉しくて体の芯がふつふつと熱くなってきた。

夕方になると、俊雄と手をつないで夕暮れの町を歩いた。真っ赤な太陽が、私たちの顔を赤く染め上げた。本当に太陽が私たちの顔を赤く染め上げたかどうかはわからない。

久しぶりに俊雄と手をつなぎ、俊雄の体温を受け取った。手をつなぎながらも、俊雄は照れくさそうにし、私とはあまり目を合わせようとはしなかった。私も久しぶりのことで、あまり俊雄の方を見なかった。

駅に着くと、私たちの手が離れた。また、つなぐ日が来るとわかっているのに、もつともつと私の手が俊雄の手を欲していた。

駅の券売機で俊雄に切符の値段はいくらだとか言われながら切符を買い、券売機から離れた。

「値段なら、わかってたのに」

俊雄の家に行くときに払った分と同じ分の切符を買いえばいいのだから、俊雄に言われなくても私はいくらの切符を買いえばいいのかわかっていた。

「親切に教えてあげたんだから、良いじゃないか」

口を尖らせながら、子供のような口調で俊雄が言った。

これから先、子供のような表情をする俊雄を私は何回見ることになるのだろうか。何回、俊雄は私の手を握ってくれるのだろうか。

夕焼けを浴びながら、改札口の脇で俊雄の顔を見た。切符を両手で包み込むように持って。

「これから、少し忙しくなるな」

私は、小さく頷いた。

忙しくなったってかまわない。幸せへ向かうための準備なのだから。決して辛いことではない。きっと心地いい忙しさに日々を追われることになるのだろう。

「じゃあ、行くね」

「ああ」

そろそろ電車に乗ろうと改札口へ向かおうと歩き始めると、俊雄がもう一度私の手を握った。私も軽く握り返すと、お互いの瞳をじつと見つめた。名残惜しむように手を離すと、切符を自動改札機に通し、改札の中へと入った。

数歩進み、振り返ると先ほどまで私たちがいた場所に俊雄はいた。そして、穏やかな笑顔で私に手をふってくれていた。

「気をつけてな」

うんと一つ頷いて、私はプラットホームへと続く階段を上った。

こんなにすがすがしい気持ちで、俊雄と一緒にいられるのは久しぶりだろう。結婚にこだわり、お互いの心が分裂していた近頃では、考えられない光景だ。

最寄り駅の階段近くの場所に立ち、電車を待った。真っ赤な太陽は、俊雄の家を出たときよりも低い位置にいた。

電車は五分もしないでプラットホームへと流れ込んだ。電車に乗ると、車内は少し混雑しており、私は開いていないドアの前に立ち、俊雄の住む町をじっくりと見ることにした。

ダイヤモンドになるために

人は、傷つかないと大切なことに気がつかない生物なのかもしれない。

私と俊雄は、お互いに傷つけあい、ようやくお互いがどれだけ相手のことを必要とし、大切な存在であるかを知ったのではないかと思う。

その代償は痛いけれど、結果として私たちはようやく大切なものを手に入れようとしているのだ。

大切な人を大切にすることは当たり前のことだと誰もが思っているかもしれない。だけど、大切にすることというのがどういうことなのか、そこまで具体的にわかっていてる人はこの地上にどれだけいることだろう。

俊雄とめでたく結婚が決まり、私は退職することにした。もう倉持君と顔を合わせることもなくなる。妊娠こそしなかったが、倉持君からとんでもないものを送りつけられた。

誕生日が過ぎてから数週間がたった頃、体に違和感を覚えた。疲れがたまっているのだろうと思っただけけれど、俊雄との結婚が迫っていることもあり、早めに病院へ行ったのだ。すると、感染症と診断されてしまった。

記憶の糸をたどってみると、どう考えても、倉持君が感染源だとは思えない。俊雄には隠すことなく、正直に性感染症にかかったことを話すと、これまで以上に倉持君のことを激怒していた。

俊雄との具体的な結婚の日程が決まったわけではないが、早めに退社することとし、後任に引継ぎをはじめた。後任は他の部署から来た私よりも三歳若い女性だ。彼女とは、これまであまり話をすることがなかったのだが、同じ部署になり、話す機会は飛躍的に増えた。

実際に、彼女と話をしてみるととても話しやすい印象を受けた。彼女は華があるけれど、高飛車な印象があった。近寄りたいたいよ
うな存在だったのだが、本当の彼女は全く高飛車でもなんでもなく、
気さくでとても楽しい人だった。

私の話にもまじめに耳を傾けてくれ、引継ぎ期間が1ヶ月しかない
ことを恨んだ。もう少し、彼女と話をして、仲良くなりたいとい
う気持ちが私の中に自然と出てきたのだった。

その一方で、倉持君に抗議をしようとそのタイミングを見計らっ
ていた。

どうせもうすぐ顔を合わせることもなくなるのだから、その前に
言いたいことを言ってしまうおうと言っわけだ。

ある晴れた日の昼休み。いつもなら後任の彼女と一緒にお昼を食
べているのだが、彼女が株主総会に出席することとなり、珍しく一
人でお昼を食べた。株主総会に出ている人が多く、社内には余り人
がいない。自分の席で今朝買ってきた新発売されたサンドウィッチ
を食べ終わると、なんとなく屋上に上がってみることにした。

廊下を歩く人の姿もほとんど見られない。今年は総務で残ってい
る人といえば、私と倉持君くらいしかいない。他の部署もだいたい
同じくらいの人しか残っていないようだ。

屋上へと続く階段をのんびりとした気持ちで上った。人が少ない
というだけで、いつもの緊張感が少しほぐれたような気がする。

恭子も株主総会に出ると言っていた。同期で、今社内に残ってい
る人は、私と倉持君だけだ。

手すりにつかまり、腕に力を入れてゆっくりと一段一段上ってい
く。屋上につく頃には、軽く息が切れていた。

階段を上りきり、息を切らしながら屋上の扉を開けると強い日差
しが私の目に飛び込んできた。一瞬、目を瞑り、手で目を避けなが
ら屋上を見渡すと、そこにはボーっと空を眺める倉持君がいた。

屋上の手すりに肘をつき、器用に頬杖をついている。

「倉持君」

低い声で倉持君を呼ぶと、倉持君は寝起きのような顔で私のほうを振り返った。

「お！ どうしたんだよ。もしかして、婚約を破棄して俺と付き合おうって言うのか？」

にやけた顔をして、倉持君が冗談とも本気とも取れるようなあやふやな表情で言った。

「何、寝ぼけた事言ってるのよ」

呆れながら、倉持君の隣に立った。間隔を30センチ以上あけて

「じゃあ、なんなんだよ」

「倉持君って、性感染症持ってない？」

「えっ………まさか………」

急に倉持君は、額に脂汗をかき始めた。

「そのまさかよ。病院に行つて、びっくりしたんだから」

「………ごめん」

頬杖をつくのをやめると、倉持君は手すりに額を押し当てた。私は手すりに凭れて、腕を組み、倉持君の脂汗を見ていた。

「まさか、移るとは思ってたさ」

「移る以前に、倉持君って不特定多数のパートナーがいたの？」

ゆっくりと顔をあげると、倉持君の額が赤く染まっていた。

「ああ」

「呆れた。それでよくプロポーズが出来たものよ」

強く掃き捨てると、倉持君は青ざめた表情で私のほうを向いた。

すぐに私は、倉持君から視線をはずし、ふいとむくれて見せた。

「まあ、怒って当然だよな。でも、まさか………」

「もう何遍も同じ事を繰り返さないで。もう最低。言い訳ばかりして。言い訳なんかよりも、反省して欲しいわ。自分が性感染症にかかっているのに、よく私にあんなことを………」

そこまで言うと、私はぐっと唇をかみしめた。

「ごめん」

つぶやくように倉持君が言った。

思い切りのけぞって、私は空を仰いだ。眩しい太陽の光に目を瞑りかけながらも、空の青を感じたかった。大きく息を吸うと、肩が大きく揺れた。そして、大きく息を吐いた。

これは、決して謝ってすむような問題ではない。倉持君が何十回、何百回謝ったって、私の頭の中からあの日のことが消えることはない。

私自身も、どうやってあの日のことを処理すれば良いのかわからないでいる。

「あの日、私が感じた恐怖は一生私の心の中に残り続ける。あの日からずっと、忘れようとしてきたけれど、出来なかったから」

私のほうをじっと見ていた倉持君が、唇をかんだ。自分のしたことを悔いているようだ。

「謝ってすむような問題じゃないんだよ。まさか、春日さんがこんなにも悲しむとは思わなかったんだよ」

これが、男と女の性に対する考え方の違いなのだろうか。

近くの小学校から風に乗って児童たちの甲高い声が聞こえてきた。思い切りはしゃいでいる子供たちの声。あの日以来、私ははしゃぐことが出来なくなっている。子供たちのように公園を飛び回って走ることが出来たらと思うと、悔しさがこみ上げてきた。

「悲しんだのは、私だけじゃない。フィアンセだってそうよ」

風に溶けるように言った。

「.....」

無言になった倉持君は、暗い表情でビルの下を覗き込んだ。

「フィアンセって、あの日、ラブホから出てきた男だろ？」

倉持君もまた、風に溶けるように言った。

「そうだけど」

「フィアンセって言ったって、浮気してたわけだろ？ 春日さんは、それを受け止めたって言うのか？」

「ええ。受け止めたわ」

一瞬にして鋭い表情で、倉持君が私をまっすぐに見つめた。碎け

たガラスの破片のように、鋭い眼光を向けられ、私は武者震いした。「良いのか？ 本当に、受け止めてよかったのか？」

「今更、倉持君に何を言われたって、私の気持ちは変わらないわ」今度は、私が鋭く倉持君の瞳を射抜いた。根負けしたのか、倉持君は納得とも落胆とも取れるような表情をすると、苦笑した。

「完敗だな」

自分を嘲笑う倉持君を私は隣でじっと見つめた。風に揺られる倉持君の髪が、一層悲しさを増して見せているように感じた。

「それじゃ、先に下に行ってるから」

「ああ」

倉持君の小さな返事を聞くと、私は一步一步確かめるように屋上のコンクリートの上を歩いた。

もう言いたいことは言った。

後数日もたてば、私はここからいなくなる。そして、俊雄の家へと引越すのだ。私はこれから、夢に描いた幸せを築いていく。

退社の日は、あいさつ回りだけで終わった。お世話になった人々へお礼を言つて、雑誌で紹介されたこともある店の焼き菓子を渡して。

すでに、私がやっていた仕事は全て後任の彼女がやっている。もう私に質問することすらないようだ。朝、「今日で終わりだから、聞きたいことがあつたら何でも聞いて」と言ったのだが、彼女は黙々と自分の仕事をしていた。

もうここに思い残すことはない。

彼女のテキパキと作業をこなす姿を見ては、しみじみと思った。定時になると、総務部の人間だけの歓送迎会が行われた。さすがに酒浸りになることはなく、適量をたしなむ程度にしておいた。

もうすぐ終わる。

私の会社生活は、幕を閉じようとしている。

よく行く居酒屋での歓送迎会は、予約していた二時間がたつと終わった。もう一軒という声も聞かれたが、主役である私がここで帰るといって、みんなで帰ることになった。

ぞろぞろと総務部の人間が駅まで歩く。この顔ぶれで、こうして並んで歩くのもこれで最後だ。

同僚たちと別れ、私は俊雄と待ち合わせしていたある駅に向かった。一人、電車のドア越しに夜空を見ると星はほとんど見られなかった。月さえ隠れている。電車内には座る場所はなく、数人がつり革につかまったり、私と同じようにドアに凭れたりしている。

目的の駅に着くと、まばらに降りた人たちとともに改札へと向かった。改札の外にはすでに俊雄が待っていた。私に気付くと、俊雄は薄く笑みを浮かべこちらをじっと見つめた。

「待った？」

改札を出て俊雄の前に行くと、俊雄に言った。俊雄は首を軽く左右に振った。

「じゃ、行こうか」

「うん」

強い意志が感じられる俊雄の顔。そして、俊雄は私の手を握り、私を力強くエスコートしてくれた。

「ねえ、俊雄」

駅から数メートルほど離れたところで、ふと気になっていることを思い出した。

「どうした？」

俊雄は岩のように強い表情を崩すことなく返事をした。

「浮気相手は、どうなったの？」

精神的に不安定になるような質問だったのに、つないでいる俊雄の手はピクリとも動くことはなかった。

「とつくに終わってるよ。今ごろ違う男でも作ってるんじゃないか」
淡々と話しながらも、つないだ手からは動揺が感じられなかった。
高校生のときから、俊雄が嘘をつけないことはわかっていた。

「違う男って……結婚してる人でしょ？」

「そうだよ。でも、あの人は浮気を繰り返すんじゃないかな。俺と不倫したけれど、相手は俺じゃなくてもよかったみたいなのを言われたからさ」

ぎゅっと手を強く握ってきた。別れ際に浮気相手に何かを言われたのだろう。俊雄の横顔は、人を威嚇するかのような顔で怒っていた。

夜風が涼やかに私たちの間を通り抜ける。

人の少ない夜道をしっかりと手を握って歩く。たまに電灯に照らされて。

「大丈夫か」

しばらく黙って歩いていると、突然、俊雄が心配そうな声で言った。

「うん、大丈夫だよ」

口ではそう言っては見たが、心は震えていた。私の心を察したのか、俊雄は手を離すとその手を私の肩に回してきた。温かい俊雄の腕に抱かれて、星空の下を歩き続けた。

「大丈夫。俺が守ってやるから」

こちらを見ずに、照れくさそうに俊雄が言った。俊雄らしい素振りに、雲の上に乗っているような心地よさを感じた。

駅から数分歩いたところで、ようやく目的地にたどり着いた。そこは、警察署だ。

私は俊雄と一緒に、被害届を出すことにしたのだった。倉持君とのことは私以上に俊雄の方がかなり怒っている。

私が誕生日の夜のことを話してから、しきりに被害届を出していた。私が退社した後には被害届を出そうと言い、今日、出すことに決めたのだった。

被害届を出すとは倉持君に一言も言わなかった。突然、こんなことになったら倉持君はどれだけ驚くことだろう。

何も言わなかった私は、卑怯者だろうか？ いいや、こんなこと

をした倉持君の方がずっと悪いのだから、気にしなくていいだろう。
大きく息を一つ吸うと、俊雄と一緒に警察署に入った。

ダイヤモンドになるために（後書き）

お疲れ様でした。

迷いながら書いた作品です。

もしよかったら、感想等を聞かせていただければと思います。

現在、コンテストに応募するために手直しをしています。もしかしたら、結末を変えるかも？と思いつつ、またも迷いながら手直し中です。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8886b/>

バースデイ・ブルー

2008年11月7日09時18分発行